

入選 神奈川県 石原 桃香 様 (大学生)

私の姉には障害がある。姉は難しい話やお金の計算はできないし、人間関係を構築するのも苦手だ。アルバイトをしたこともあったが10日も持たずトラブルを起こして辞めてしまった。また、ある時は父に「一人暮らしをする！」と懇願してアパートを借りてもらったが、3日で家に戻ってきた。ここだけ読むと、大変で、姉妹の仲は悪いのではないかと思うかもしれない。しかし、その予想に反して私たち姉妹はとても仲がいい。幼い頃から姉の方が5歳上なのに私の方がよく世話をやいていたらしく、姉はそんな私を慕っていてくれたと思う。

小学生くらいの頃、私は姉に「大きくなったらももちゃんの家押し入れに住ませてね」とお願いされた。私は「おにぎりくらいなら作ってあげるよ」と返したのを覚えている。それから10年くらい経ち、アルバイトができる年齢となった私は、学生なのもあり多くはないがそれなりに稼げるようにはなった。心のどこかにあの約束が残っていたのもあり、なんとなく貯金も始めた。そんな様子を見てか、ある日父に「お前はお姉ちゃんの事はあまり考えないでもいいから、自分のために生きなさい」と言われた。そんなことを言われても私と姉はかけがえのない姉妹だ。姉妹である以上できる限りのことはしてあげたいし、ちょうどその少し前にコロナウイルスの影響で両親の収入がなくなった。都内で飲食店を営んでいた両親は、感染対策による休業要請の影響で店を閉めることになったからだ。両親の収入はなく持病があり、姉は入退院を繰り返している。それに比べ、私は大学へ通わせてもらっているし健康だ。公立のため、私立の大学に比べれば学費は安い、これから大学院に進学するとしたら収入のない両親の負担になるかもしれない。いくら私自身が貯金をしているとはいえ額はそんな多くはなく、自分で学費を払うのには限界がある。そう考えた私は、大学卒業後は進学ではなく就職しようと決心したのだった。しかし、そんな私をよそに父は「お金のことは心配はいらない。俺は65歳になったから年金がもらえるし、お母さんと一緒に毎月お前とお姉ちゃんのために貯金をしているし。」と言葉を続けた。それでも収入がなければお金は減る一方であるし、約束が頭の片隅に残っていて姉の分も稼ぐことを考えていた私は「でもさ、お姉ちゃんの入院代とかも大変でしょう？」と

返した。姉は入退院を繰り返しており、直近の半年間で家に戻った期間は一時退院の数日間しかないのだ。父は「国にはね、障害年金って制度があるんだよ。最低限の生活は国が保障してくれるんだ。」と言った。「障害年金」という言葉に、私は学校の授業で少し聞いたことがあったなと思い出す。そして父は「お姉ちゃんの障害年金の申請が通ったんだ。だからね、大丈夫。自分のために生きなさい。」と先ほどと同じ言葉を繰り返した。

姉のことは大好きだ。約束を破ることはしないし、今再び姉に「押し入れに住ませてね」と言われてももちろん承諾するだろう。しかし父の「自分のために生きなさい」という言葉も、私の胸にしっかり刻まれている。大学を卒業したら大学院に進学したい。大学院を卒業したら色々な会社に勤めてみたい。会社を退職したら世界一周をしてみたい。少し前とは違う将来のビジョンが見えてきた。障害年金により姉は助けられている。また、姉だけではなく両親も救われている。そして、私にとって「自分のために生きる」ための大切な制度なのだ。